IMAJ ニューズ
NO.12
国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和52年6月20日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL. 03－374－7600
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

産業界の新しい責任を考える

産業人会議ひらく

5月20日、帝国ホテルの国際会議場で産業人会議は盛大に開催された。世界経済の曲り角にたって日本の国際的責任と、産業界の新しい役割を求めて、わが国産業界、労働界のトップクラスの人びと300名が参加して行われた。海外からもオランダのフィリプス会社会長のフィリプス博士夫妻を始め、オーストラリヤ、西ドイツ、ノールウエイの各界代表も加わり、お互いに問題の基本的考え方について卒直な意見交換が行われた。

宮田義二氏
（日本鉄鋼労連・委員長）

土光敏夫氏（経団連・会長）

会場受付では数少ない事務局員を助けて国鉄職員や東芝本社社員の方がたが活躍した

高瀬正二氏
（東京芝浦電気㈱・常務）

フレドリック・フィリプス氏
（オランダ・フィリプス社・会長）

グリフィス氏（オーストラリヤ総理府高官）と尾関氏（国鉄・常任理事）
尾関氏は「海外代表の発言の底には哲理がある」と語る

フィリプス夫人・ショック夫妻、
鈴木氏

ヘンシェル氏（西独労働総同盟政経部長）と語る滝田同盟会議顧問
ヘンシェル氏は「ヨーロッパはもっと日本を理解しなくてはならない」と語る。中央はエンツ・ウイルヘルムセン氏（ノールウェイ）

畑　和氏（埼玉県知事）

ピーター・ピータセン氏
（西独・国会議員）

木内信胤氏
（世界経済調査会・会長）

フリードリッヒ・ショック氏
（西独・ショック社常務）

河原亮三郎氏
（東芝機械㈱・相談役）

中島正樹氏（三菱総研・社長）

滝田実氏（同盟会議・顧問）

高木文雄氏（日本国有鉄道・総裁）

マイクに向って話す土光会長、正面向って左から宮田氏・中島氏・砂野氏、
ヘンシェル氏・デパウス氏・グリフィス氏・その手前は滝田氏・河原氏・鈴

熱心に提言者の言葉にききいる参加者

第二部　懇親会ではフィリプス夫妻始め、海外代表のスピーチや、高木国鉄総裁、畑埼玉県知事のあいさつが次つぎと行なわれた。

五月二十一日、海外代表たちは憲政記念館で超党派で集まった国会議員や法眼普作氏（国際協力事業団総裁）、国鉄労働組合の村上委員長らと会食し、懇談した。

席上、法眼総裁は「すべての人が心のそのままをテーブルの上にのせて話す、そのことが問題解決の鍵」と語った。

道正内閣官房副長官と語るショック氏

山口代議士（新自由ク）と語るグリフィス氏

産業人会議の成果を期待するメッセージが各方面から送られてきたが、その中には国際産業人会議パリ委員会（ヨーロッパ８ケ国）やわが国衆議院の保利議長からのものもあり、会議の雰囲気をいっそう盛りあげた。

海外代表はオランダのフィリプス社会長のフレデリック・フィリプス夫妻を始め全員九名で出身国は五カ国に及んだ。会議の翌日には別掲のように憲政記念館でわが国の国会議員始め各界の指導者と政経懇談会を開くなど海外代表たちの活躍は非常に積極的であった。

産業人会議と政経懇談会を通しての海外代表並びにわが国代表たちの意見のごく一部をここにご紹介することにした。なお当日の参加者全員には議事録が作成され配布されることになっている。

河原亮三郎氏
（東芝機械（株）相談役）

戦後三十年余り、われわれは自由主義的合理主義と言いますか、すなわち企業家は利潤極大、労働者は賃金極大、消費者は消費極大、政府はＧＮＰ極大を目指して最大の効率をあげることに成功したかに見えます。近代の高成長を実現したのもそれによってかという具合に見えます。

しかし、これがすでに限界に達し、成長に大きなブレーキがかかってきたようであります。低成長には何かと摩擦がつきものであります。そして今やこれからの成長のメカニズムがそのまま通用しそうにありません。民主主義が道を間違えて、言いたい放題、やりたい放題の悪弊だけが高成長の置き土産となって残ったのでは近所迷惑もはなはだしいものがあり、摩擦を大きくするだけであります。

そもそも今日の危機の根源は案外こんなところにあるのではなかろうかと思われるわけであります。

人間の集団には常に一〇パーセントないし二〇パーセントの反体制分子がいるものです。これらの分子と同居して平和と効率を維持するには、法律や圧力や物力だけで片付くものではなさそうです。

何はともあれ、いよいよ厳しく騒々しいこんな世の中で高邁な理想を実現しようとするならば、個人、特に持てる者の心構えを変えて日常の実践活動が正義と公正、すなわち「誰が正しいか」から外れないことであると思うのであります。

イエンツ・ウイルヘルムセン氏
（ノールウエイ労働評論家）

私はヨーロッパのわれわれが往々にして日本に対して非常に無知で、そしてまた無関心であることを恥かしいと思っています。ヨーロッパと日本を緊密につなぐためにこの会議が役に立つことを望んでいます。

産業人会議を代表するヨーロッパの実業家たちは、お互いが協調を見出すことによって、対決でなくて協調によって解決できることを信じています。これはヨーロッパと日本の間でも同じだと思います。また富んだ国、富まざる国の間も同じだと思います。また、それぞれの国の経営側と労働側とにおいても同じだと思います。

ただ、この協調は今までのとは違った新しい革命的な内容が必要だと思っています。過去において往々にして協調を唱える人は自分たちが現状を維持したいために、持たざるものに協調を要請したことが多かったのです。そして持たざる人たちが当然持つべきものを拒んでまいりました。ですから、この世界の現状を変えていくためには、協調はただ自分たちの利益を守る目的であってはならないと思います。この協調というものの基本は自分以外の国、また、グループ、また他人が十分に発展できるような、あるいは育つための内容を持たなければいけないと思います。

態度を変えるだけでは足りません。そういった新しい態度を醸しだすような社会機構も必要だと思います。この点においてはヨーロッパと日本はお互いに与えうるものがたくさんあると思います。

ルドルフ・ヘンシェル氏
（西独総同盟、政経部長）

一個人、または一グループ、一国が他人の、またはほかのグループ、他国の犠牲において存続していくことは許されないと思います。協調して初めてお互いに存続することができるわけです。一国の利益というものを追求しようとすると、他国の利益に矛盾するということになります。

問題は、相対する利害というものが現実にありながら、長期的にみればみんなが利することができるような道はどこにあるのか、それは何かということを発見することであります。

私はこういったお互いに生き残る道を見つける一つの手立ては、お互いに交わす協定またはお互いの約束において、自分が共同の利益のために多少譲歩する。譲ったその犠牲が相手によって搾取されないという信頼関係があるかどうかとにかかわってくると思います。

砂野　仁氏
（川崎重工（株）相談役）

失業問題にしても賃金問題にしても、もっとその重点に向って虚心たん懐に話し合うべき日がもうきています。昔はいい加減なことですんだかもしれないけれども、今や本当にみんなが真剣に考えなければ、日本の構造的、体質的な不況からの脱却は非常に難しいというふうに私は思うのです。

宮田義二氏（鉄鋼労連委員長）

労働組合にとっていま最も大事な点は、労働組合のエゴイズムを脱却するということだと思います。例えば物価と賃金、この問題は日本においても大変大きな課題です。私どもはいま賃金だけがこうしたインフレの中で実質的に大幅に拡大をするということを望むことは、結果として日本の経済の破壊につながるのではないかと思います。

老齢化社会というものがおとずれようとしています。そのために必要な社会的なコストへ向けて、労働組合がどれだけ富の分配に譲歩できるのかどうか。そこが大きな問題だと思います。

また、賃金を引きあげることが物価の上昇に大きな影響があるとすれば、物価の上昇を止めるためにどうするか労働組合が考えなくてはならない事態がいまきていると思います。私はその意味で労働組合が社会的な責任、国際的な責任など十分にふまえて、これからの話し合いの中に参加する必要があると痛感しているわけです。

土光敏夫氏（経団連会長）

私が強く感じますのは、やはりわれわれとしてはMRAが言うように各個人個人がただ自分のことだけでなく相手のこと、社会のこと、すべての問題を考えた一つの正しいルールというものが必要だと存じます。宇宙社会的においていろいろの現象がありますけれども、決して単に自由奔放のものではない。われわれはこの宇宙の中において、宇宙のルールによって、それで生存をしているものと思うものであります。そういう意味におきまして、私はMRAの言うように各々がお互いに共通するルールを持って、そしてやっていくということは、社会が高度化し多角化されるにつれて最も重要なことであろうかと思うのであります。

今夏、スイスのコーでこのような世界会議が開かれ、混乱する世界経済界の安定のために、お互いのルールを見つけるということは非常に重大なことだと思います。

滝田　実氏（同盟会議前会長）

国際組織に参加をし、そしてその分担に応ずるということについては、極めて日本の労働組合は保守的であります。この政府と産業界と労働組合が、開発途上国にそれぞれの分野でどのくらい国際協調ということを身をもって示すかということが、私は日本に課せられている大きな問題であり反省でなくてはいけないのではないだろうかと思います。

フリードリッヒ・ショック氏

（西独・ショック社常務）

私どもが今日いちばん必要としているのは、政治家であれ、労働者であれ、それから私のような実業家であれ、正直という概念の上にその関係をつくることであります。エアハルト前首相がなくなる前にテレビのインタビューアが「エアハルトさん、あなたがドイツ国民に残していただける個人的な遺産は何ですか」と聞きました。エアハルトさんいわく「正直な政治家がほしい。だれが正しい人かというのではなく、何が正しいかということを真面目に考える政治家がほしい」と。これは今日もなお健全な概念だと思います。

木内信胤氏

（世界経済調査会会長）

第一は輸出です。人様の迷惑になるような輸出はもうしないこと、つまり輸出という国際交流の分野において、相手国のいやがるところまで進出しないこと。

第二は開発途上国自身が好きなような国づくりをなさい。それをお望みならお世話しますといった態度をとること。今までは自分がもうけたいから自分の経済を発展したという私の心があるからいけない。

第三はものの考え方を変えてほしいのです。

全部いわゆるGNPに翻訳して、それが増えればいい。日本の援助はGNPの何%しかないからいけない。ああいう考えはもう全部打破することです。あれが物質に即した考え方です。同じ程度のものをコンシュームしても、満足感を得るかどうかが問題です。

ものの考え方を変えてみることです。

中島正樹氏（三菱総研（株）社長）

人類の福祉のためにはいろいろの夢がありますが、それらを実現するためにはそういうことを実現するために世界人類がみんな世界福祉税といって所得の一パーセントだけ一律に国民全部が出すということだと思うんです。一パーセントがいきなりできなくてもいいのです。〇・五パーセントで〇・三パーセントでも結構です。

ただ国民は自分の所得いかんにかかわらず出す。またそれは免税もない。例えば一〇〇万円の所得のある人は年一万円出す。日本全体として約一兆円、三〇億ドルは毎年できると思うのです。その金の使い方はもちろん乱暴に使われたり政治的なことに使われたりすることなく、インツフストラクチャーという人類の福祉に貢献することに使われているとなれば一つのプライドを持てると思います。

アラン・グリフィス氏

（オーストラリヤ総理府高官）

二〇世紀の偉大な予言者であったフランク・ブックマン博士は、「人の心に働らきかける声がある。人が利己心を捨て憎悪の

念を追いやって物質に背を向けた時、その声は聞こえる」ということを言っておりました。その秘けつを十河総裁がブックマンから学ばれたものであり、それが新幹線というすばらしいものに結集したのだと思います。

ピーター・ピータセン氏（西ドイツ国会議員）

旧植民地だった現在の発展途上国の多くは、今の苦しさは旧植民地の責任であるという。英国、フランスまたは日本に科を着せるというようなことを、余りにも簡単にやってのけるわけです。そういう責任の転嫁は非常に抜け出し難いワナだと思います。

私はここで植民国がよかったか悪かったということを言っているわけではないのです。ただ物事がうまくいかなくなると他に責任を着せるということでは働く意欲も生れてきませんし、そういったことでは国民的な規律というものもつくれないということを言っているわけです。日本とドイツはある意味では幸せにも戦後責める国がなかったわけです。それがわれわれがそういったワナに陥らずにすんだ一つの理由ではなかったかと私は思っております。

滝山　養氏（国鉄・技師長）

日本は戦後、産業界はGNPを伸ばすこと、労働界は賃金のベースアップのこと、また政界は票を集めることに専念して今日まで繁栄をしてきたわけですが、今日は行き詰りと曲り角にきているわけです。

ここに至って相手の非をせめることでは問題の解決になりません。良心の命じる神の声に従って何が正しいかということを見出すことによって国内の協調ができ、海外の協調もできるのではないかと思っております。

高瀬正二氏（東京芝浦電気(株)常務）

今回の東京会議を契機としてヨーロッパと日本との間において相互理解のために、双方の意識的努力が払われることを期待します。

今日のように困難な行詰りの時代ほど人間尊重の精神に根ざした「道義の回復と実践」が必要な時はないと考えます。「道義の実践」は終極的には、一個の人間としての生き方、考え方に帰着する問題で、企業活動も結局は、「一人一人がどう生きるか」の問題であるし、労使関係の良し悪しも「人間的信頼関係」の良し悪しによって決まるといってよいのです。道義の回復と実践が強く叫ばれねばならない所以です。

高木文雄氏（国鉄・総裁）

日本人の心の中には、近代文化と鉄道とを切り離すことができないというなにかひとつの愛着というものがあります。そうした特殊な鉄道ですが、経営的にどういうふうにうまく成りたつようにするかというのが私の役割になっています。そういう意味で改めて日本の中で日本人が一生懸命考えていかなければならないのですが、同時に世界中の方々の知恵も改めてまたいただきたいと思います。その意味で今日、MRAの関係で世界中の先進的な役割を果された方がたがお集まり下さるときいてぜひ皆さまとお友達にならせていただき大いに知恵もいただいて明日から元気をだして一生懸命仕事をしたいと存じます。

畑　和氏（埼玉県知事）

私とMRAとの関係というものは　案外古いものでございます。私がまだまだ若いとき埼玉県の県会議員をしていましたころ、イエンツ・ウイルヘルムセンさんが私の家におとまりになったことが一番最初のMRA勢力との交わりでございました。

私は政党的には社会党に所属したしておりますがもともとMRA精神を非常に尊敬しておりますので、お互いのイデオロギー的な対立というものにはやはり人間的なものがその前になければならぬというふうに考えまして実はいま、たまたま埼玉県五〇〇万の県民の知事といたしまして五〇〇万の県民の県民党だというような意識で、社会党に所属いたしております。多数野党にもかかわらずなんとか埼玉県政を運営いたすことができますのもやはりMRA精神の感化によるものだと私は考えておるわけです。

フレデリック・フィリプス博士

はじめ私が会社の経営に参加したときに、自分の成功ということが一番問題だったのです。しかし、妻と私がMRAのブックマン博士にお目にかかりましたときを機会に私どもの考え方が変ったのでございます。私自身が成功するかしないか、私自身がどうなるかよりも、私のまわりにいる人達にどういう影響を与えるか、その人達がどうなるかの方がはるかに重大だということを悟りました。

私も貿易、輸出を主とする会社をもっております。それが伸びれば大変よいことだとお思いでしょうが、その結果、相手の国に失業者がふえることは必ずしもよいことではないでしょう。結局、この時点では人々に対してどういう結果を与えるかということを考えるべきだと思います。

私たちは自分の本来の姿をみて、謙虚になるべきだと思います。謙虚になったときに我われの心になにかひらめきが与えられるかも知れません。正しいことを本当にのぞめば、それが起るという信念をもたなければならないと思います。

海外代表を迎えて政経懇話会は五月二十一日、憲政記念館で超党派の国会議員（大坪源一郎、野田卯一、沢田 広、受田新吉氏など）参加のもとに昼食を共にしながら開催された。その席上、まず尾崎記念財団理事長代理の相馬雪香氏は次のように挨拶された。

「父の遺言は、これからの日本は世界に目を見開くこと、そして世界に尊敬される国にならなくてはならない。そのためには世界と手をつないで孤立しないことが大切だと言っていた。その意味で今日の会合はきっと父も喜こんでくれていると思う。本日、超党派で先生方が集まって下すったこと、また国際協力事業団総裁法眼先生、国鉄労組の村上委員長さん……のご出席を心から感謝いたします。」

政経懇話会で語るフィリプス博士。手前は愛田代議士

フレデリック・フィリプス博士

戦後、旧敵国であるドイツと始めて私たちを合わせたのはMRAのブックマン博士であった。そして新しい世界は皆が一緒になって作らなければならないといわれた。それは言うは易しいが私たちには心の葛藤があった。私も家内もドイツの収容所の経験をしている。占領下に多くの友人も失っている。

しかし、私たちが新しい世界建設のために心の中の憎悪を神の前に捧げたとき、心の中に新しく愛が生れてきた。新しい目標のためにドイツ人と一緒にやれるようになった。世界を変えようという努力に元ドイツ共産党員の心も掴むことができた。これは私たちが身をもって経験した貴重な体験であった。

こうした信念に生きるときすべてが可能になる。商品で人の心を掴む時代は終った。心で人の心を掴むことこそ必要である。このような仕事はどこから始めるか、まず家族からである。息子とうまくいってない親は、見もしない他人をどうすることもできないだろう。

シルビア・フィリプス夫人

恐怖と勇気は全く反対のものです。恐怖心にかられている時は自分が正しいと思っていることも言えない。この恐怖心をどうして自分の中から追いだすかということが問題です。政治家の方がたにとって〝選挙民がどう思うだろうか〟また〝選挙民が投票してくれるだろうか〟そういう心配、そうした恐怖がおありのことと思います。

恐怖にはいろいろの型がありますが、自分の良心のささやきに従うとき、自由になり恐怖は去り、勇気は生れます。

戦火の中で、私は夫と離れ七人の子供と爆弾の落ちる中にいて私の心は自分でも驚くほど静かでした。それは自分の良心が問いかけることに従うという実験をしたあとのことでした。

ピーター・ピータセン氏

フィリプス氏はいま過去のきつい思い出から解放されたことについて話された。そしてここにいる私たちドイツ人がいたたまれなくなるようには話されなかった。

このように過去の憎しみから解放された人びとは世界に何百万人いる。過去に収容所に入った人たちも何百万といる。それに関係した人たちも何百万といる。東南アジアを旅行すれば、日本に対して憎しみの感情をもった人にもまた何百万人と会うことができる。

ここに重要なことが一つある。

二十五年前のこと、フィリプス博士にあったとき、その過去から自由になるということは、過去を指さして自分が圧迫を受けないという保証にもなるということを知った。

世界の各地をみて感じることは、共産主義者はいかに上手に過去のあやまちを使っているかということである。利用をされる過去をもっている者は自分を自閉してしまいその罪の廻りにコマネズミのように動き廻らねばならないということです。

私の息子は今年23才、彼の世代は祖父の時代のあやまちもまた父の時代のあやまちについても何故、いつまでも自分たちがその科を受けねばならないのかと反問します。

国際関係においては自国の過去のあやまちに恐迫されないことは大切です。私は恐迫の種か

ら解放してくれたフィリプス博士に感謝する。

過去二十五年、私たちは国民総生産をあげ共産主義を国境からしりぞけた。たしかにこれによって解決した面もある。事実、戦後の衣食住に苦しんだ時代に比べて、現在は屋根のある住いと、飢えをしのぎ、着物もある。しかし、経済成長をはかるだけが政治家の役割であろうか。

自然界を破壊し、大気を汚染させる、これでよいのだろうかと反問する人も増えている。理想主義者たちは成長はゼロでしかも生活水準を向上させようという。これは現実的でない。

政・労・使の食べる菓子の分け前は同じでないと分取り合いの戦いはますます激しくなるだろう。

専門家たちは異口同音にイデオロギーとしての共産主義は崩壊したと言う。いまは苦しい時代だが、我慢すれば孫の世代にはよくなると考える――その考えは通用しない。その意味で共産主義は失敗している。中国はかなりの食糧を輸入にたよっている。逆に日本は余剰米をどうしようと考えている。行政システムとしての共産主義も破たんしている。

しかし、反共だけでは十分でない。国民総生産で対抗はできない。「自由というものは放任主義だ。」これも答えにならない。

「夢のない国民は死んだ国民だ。」私たちは心と頭とエネルギーを用いて何を夢みるか、公共に仕える人として政治家は夢をつくることが大切だと思う。

フリードリッヒ・ショック氏

西ドイツの失業率は4パーセントだが、とかく私たちは問題を重くとりあげすぎる。そして他の国も大きな問題をもっているということを忘れがちだ。どこの国でも問題はいろいろある。しかし解決していかなければならない。その解決の糸口はコミュニケーションがうまくいってるかどうかである。昨日、貿易センタービルにいって各国の情報コミュニケーション機器類が所せましと並んでるのをみたが情報器機の数量をふやすことが対話を促しているだろうか。答えはNOである。

日本では与党と野党の議員が一緒に話しあうことは余りないと聞いた。労と使の関係も同じである。残念ながらドイツもまた同じである。

私たちの直面する問題は国際的なものが多い。そういった解決には他人に対する新しいものの見方、新しい勇気、それが必要だ。

産業界に身をおく私たちは、工場の第一線の人とその中間の人たちと会話の道を開いていく、それが大切である。

昨日の産業人会議での政・労・使の話合いはすばらしかった。あれが日常茶飯時になってほしい。できれば西欧諸国でもやってほしい。

ブックマン博士の言葉を引用するまでもなく「自由の目的は啓発された民主々義である。神はインスピレーションの源であり、神の声に従う用意があれば達成できる。」それは未来の扉を開く鍵だ。

ルドルフ・ヘンシェル氏

戦後三十年間、ひたすら労組の仕事に専従してきた私は社会に対して深い興味をもっています。

経済的側面を考えずに世界をみることはできないでしょう。経済こそ社会の状態と常に相関関係があるからです。

私は三十年間、心に足る仕事をしてきたと思っています。日本もまた誇りうる仕事をなしとげたと思います。

しかしながら、日独両国の復興は、果して他の国ぐにに貢献しているだろうかと考えるとき、決して十分でないということを痛感します。

私はドイツ人として日本の方がたに敬意を表していました。それは貴国では戦後、自己の責任を認め、それを跳躍台として復興したことです。そのように貴国を理想的にみていたが、二年前、ドイツにも経済危機がおとずれ、鉄鋼、ボールベアリングなどの問題で、日本にどう対処し処理すべきかに気づき始めました。

そして私たちDGB（西ドイツ労働総同盟）はこれを具体的に検討始めたのは数ケ月前です。南北問題についても真剣に考えはじめました。

その折も折、こうして来日できたことを感謝しています。そして他の国のことを考えないで自国だけで、このような大きな世界的問題を考えるということは間違いだと気付いたのは二、三日前のことです。

世界的な共通問題を解決するには、例えば通貨問題など、じっくりと話し合うことが必要です。

およそ人間の考え方は、その人が生きてきた人生、その人の属している組織で倍われたもの、その人の環境、背景、価値判断から考えだされるものです。その人のプライオリティのつけ方の違いもありましょう。そうしたすべてを乗りこえた解決、それが鍵ではないでしょうか。

しかし、MRAの理念にそっていくなら、これは人間性を基調にしてそれを最高のプライオリティにしていくので解決の糸口は、ここから流れだすものと確信いたします。

MRAが世界的に、具体的な成果をもたらすことを期待しています。

法眼普作氏

（国際協力事業団総裁）

只今、日本を訪問された海外からの方がたから有益なお話しを伺いましたが、私はことごとく同感です。問題は抽象的に話しあうことではあく、すべての人が心のそのままをテーブルの上にのせて話す。そのことが問題解決の鍵であり、それなくし

て物事は発展しないと私は確信します。私はMRAの方がたが深く民族の融和と人びとの結合を純粋な人道主義の基礎にたって行動されていることをよく知っています。どうかこの努力をさらに続けて、私たちもこれに相和してこの国だけでなく世界一般にも及ぶようにしたいと思います。広い観点からあらゆるものを人道主義にたち人を愛することによってその間、自分の正しい主張ものべていくという。このことを通じて次の世代に我われはよい時代を送れたということでなければ私たちの生きている意味はないと思います。

男は頭を、女性は心をと語るシルビア夫人。(左)

シルビア・フィリプス夫人

このようにたくさん男性の方がいるところで女の私がお話をするのは、大変革命的なことだと思います。

いったい世界になんで男と女がいるのでしょう。子供を生むためなのか。あるいは夫婦が本当にチームになるべきなのか。

お互いにもち味が違うのです。男の人は主として頭を働かせ、女性はとかく心を使います。今日の世界は、この頭脳と心の両者があいまつことが最も必要なのではないのでしょうか。

結婚した夫婦がチームであるということはそう簡単なことではありません。主人と私は大変性格が違います。ですから本当にチームになるためには自分達以上の知恵が必要なのです。それは私どもが時間をかけて静かに考えるとき自分の心に響く声が必要なのです。

この心の声を聞くことによって私ども夫婦のいままでの人生は大分変りました。

夫婦で心の静かな声に聞くと、すべて変ってまいります。夫婦はそうしたときに世界をよくするために二人で働けるということを学びます。

MRA世界大会産業人会議について

今年の8月31日から9月5日までの6日間にわたって、スイス・コーのマウンテンハウスでMRA世界大会の枠組の中で国際産業人会議が開かれます。その案内文は下記の通りで、わが国からも多数の参加が期待されています。ご希望の方は下記事務局あてにお申込み下さい。

すべて物事は、人間の意志と情熱によって定まるものです。歴史の推移がそれを示しています。

私たちの前途に横たわるとほうもない社会的経済的な変動は避けられないが、もしも基本的な道義と思想上の論点を理解するならば、これを正しく方向づけることができるでしょう。

この会議は、経営者や労働組合の指導者、政治家の方がたを対象に、MRAの世界大会の一環として開かれるものです。どうぞ、ご家族ご同伴でご参加下さい。

大会や分科会で討論されるテーマは次の通りです。

◇政界、財界、労働界が建設的に協力しあうためにはどうしたらよいか。

◇工業先進国と発展途上国の望ましい関係を作るために産業を何をすべきか。

国際MRA日本協会　〒151 渋谷区代々木1－38 TEL03－374－7600